

月の遣い

法学部
法律学科3年

高橋 将也

竹林が夜風を受けて、ざくざくとさんざめいていた。

四方八方に生い茂る竹は、容赦なく私を囲む。その物憂い、刺すような竹からの視線は、まるで世間のからの目にも思える。さながら、「やるなら早くやれ」と私を煽っているようだった。

私はふうと一呼吸置いてから、持つていた包丁を強く握った。もうこの世に未練はないし、生きる意味もついこの間失った。人知れず、誰にも迷惑をかけないように死ぬのなら、きつと神様だつて許してくれる。

私は目を閉じてから、ゆっくりと包丁を自らの腹部までもって行つた。

そうして閉じた目に、ふいに一筋の光が射したように感じた。私は反射的に目を開け、光の方へ目をやる。無意識のままに私の意識は、その一筋の光に支配されていた。

視線の先では、一本の竹がきらきらと輝いていた。私はそれを見て、妙な既視感を覚える。その

理由は、自分にもわからなかった。

一心不乱というべきかもしれない。私の意識と足は、その竹の方へ向かっていた。そして夢のまま、その光る竹に、持つていた包丁をそつと当てていた。包丁で竹が切れるとは思っていなかったが、刃先は案外するりと、竹を切断してみせた。私はそれに驚きつつ、切った竹の中をそつと覗いてみる。私の意識は、光るその竹に支配されていた。

竹の中には、十二単衣を着た小さな女の子が佇んでいた。目を閉じては合掌し、夜の暗さをつんざくかのような、強く金色の光を放っている。儂く、いじらしい姿だ。

私は、ふいにこの女の子を連れて帰ってしまいたいと思った。見ず知らずの女の子を連れ去るのが誘拐というれつきとした犯罪だというのは、私だつて知っている。それでも私は、彼女の放つ優しい光に触れていたかったし、既視感の正体も知りたかった。私は女の子をそつと持ち上げ、竹林を抜け出す。彼女に触れていると、その温もりを

直に感じる事ができた。彼女の放つ光はあたたく、小さな寝息は、そのいじらしさを際立たせていた。

竹林を抜け、私はあたりを見回す。そうして光が漏れぬよう、小さな体を大事に抱きかかえた。私と女の子は、夜道に行く。その時にはもう、心を覆っていた絶望感は消えていた。

朝、目が覚めると、目の前に顔があった。大きなつり目で私を覗き込み、黒い長髪を垂らしている。

私そこで一瞬驚いたが、昨日の記憶を想起し、一応納得する。私は昨晩、竹林で出会った女の子と同じベッドで眠りについたのであった。

「昨日は、どうもありがとうございます」
十二単衣を着た少女は、ベッドから起き上がり、私に語りかけた。その背丈は私よりは小さいものの、ある程度成熟した女性のそれだった。

「どうも、なのかな？ 半ば誘拐だよ、あれ」

「いえ。非常にありがたいことです。わたしはここでは、人間様に愛情を注いでもらわなければ大きくなれないですから」

女の子は言いながら、きゅっと目を細めて笑った。私はその笑顔に、はっとさせられる。昨晚抱いた既視感、懐かしさの正体が、なんとなくわかったのだ。

「君は、一晩でこんなに大きくなったの？ 私が竹林で君を見つけた時は、すごく小さかったのに」「ええ。あなたが、ありつただけの愛情を注いでくれましたから」

「私が君に愛情を注ぐと、君は大きくなるの？」「はい。あなたが一晩中わたしを抱きしめ、愛情を注いでくださったので、これ以上ないくらい大きくなることができました」

そう言った少女の声は、透き通った綺麗なものであった。この声にも、十二分に聞き覚えがある。そこで私は確信した。海馬に鮮明に焼きついた愛おしい記憶が、目の前で微笑む彼女と見事に一致するのだ。

私は弾んだ胸に手を当て、少女を見つめる。「ねえ、一つお願いがあるんだけど、聞いてもらって良いかな？」

「はい、なんですか？」「君のこと、『かぐや』って呼んでも良いかな？」

「さつきは急にごめんね」

朝食の準備をしながら、私はかぐやに小さく頭を下げた。木の椅子にちよこんと座り、紅茶を啜っていた彼女は、カップを置いてから手を振って応じる。一晩を共にした仲とはいえ、名前も聞かず急に命名するのは、今思えば身勝手だった。

「いえ、わたしにはここでの名前はありませんし、嬉しかったですよ」

「それなら良いんですけどさ。君が恋人にあんまりにも似てるから、ついね……」

私はキッチンにてフライパンでウインナーを転がしながら、そう言葉をこぼした。

「私の恋人、『カグヤ』っていうんだけどさ」私がそう言うと、かぐやはこちらの様子を伺うような調子で、椅子から小さく身を乗り出した。

「その『カグヤ』さんとは、今はどうなってるんですか？」

「もう別れたよ。だから、寂しかったんだろうね。それで、あなたを『かぐや』と呼びたくなっただと思う」

「別れてしまったんですか。それはお気の毒に」かぐやは言いながら、悲しげに眉を寄せている。

私は白い大皿にウインナーを盛ってから、そんな彼女の表情を見る。

「ほら、焼けたよ。食べな」

「良いんですか？ ありがとうございます」

かぐやの正面に座り、机にウインナーを置くと、彼女は嬉しそうに合掌した。その表情すら、愛おしい記憶と同化する。

「それでは、いただきますね」

「どうぞ食べて」

私が言うとともに、かぐやはウインナーをぱりっとかじった。

「やっぱりおいしいですね、このウインナーは」かぐやは言って笑顔になった。それにつられて私も、笑顔になる。

私の恋人は、その名前を『カグヤ』という。今私の目の前にいる『かぐや』は、その恋人と非常に似ている。ほとんど同じといっても良いかもしれない。顔も声も喋り方も、『カグヤ』のそれと一致した。私が竹林で抱いた既視感、懐かしさは、そういうところで由来していたのだろう。

「あの、すみません。わたしはあなたのことをなんと呼べば良いでしょうか？」

かぐやはフォークを持ちながら、私の方を見る。「なんでも良いけど、『カオル』で良いんじゃない？それが本名だし」

「わかりました。次から『カオルさん』と呼ばせていただきます」

かぐやはそう言って私に笑いかけると、「カオルさん」と数回、小さな声で繰り返した。それから一つ息を吸って、私を見つめる。

「カオルさん、これからどこか行きませんか？ 場所は、カオルさんの行きたいところで良いですから」

かぐやはフオークを置いてから、身を乗り出してそう言った。私は驚き、つい口を結んでしまう。

「一緒に行ってくれるの？」

「はい。カオルさん、なんだか苦しそうですから。どこか好きなところに言って、リフレッシュしましょう」

かぐやは声を高くした。そこで私は彼女が言うのを聞き、無意識のうちに苦しそうな言動をしている自分をなじりたくも思った。

「かぐや、気を遣わせてごめんね」

「いえ。わたしも、カオルさんとお出かけしたいですから」

かぐやは優しく笑いかけ、立ち上がり、私の横にある椅子に座り直す。キッチンの椅子は二つであると記憶していたが、私の横にはいつの間にか、三つ目の椅子が現れていた。

「カオルさん、どこに行きたいですか？ 私は、カオルさんの行きたいところに行きたいです」

「私の行きたいところは、たぶんあんまり面白くないと思うんだけど」

「大丈夫です。行きましょう」

かぐやは言いながら、そつと私の手を握った。その手は思っていたよりも冷たく、小さく震えていた。「重いよね、ごめん。でも私、それくらいカグヤのことが大切だったんだ」

俯くと、隣に座るかぐやが顔を覗き込んでくる。私は彼女の方を見た。

「かぐや、私が行きたいのはね、お墓参りなの」

私がそう言うと、かぐやは一瞬困ったように眉を寄せたが、すぐに小さく頷く。私が予想外の場所を挙げたため、彼女も一瞬戸惑ってしまったのだろう。それも無理はない。

「カグヤ」は、私を置いて一足先にこの世を去った。死因は、交通事故による心臓破裂だった。

暮石の前で合掌し、ゆつくりと目を閉じた。そうすると、海馬に焼きついた記憶が瞬時に蘇る。楽しかったことも、悲しかったことも、「カグヤ」との思い出が、すべて平等に想起された。

お供え物は、「カグヤ」の好きだったメロンにすることにした。朝食の準備をしている時、冷蔵庫で見つけたのだ。私の海馬にメロンを買った記憶はなかったが、おそらく以前買っていたのだろう。そう思うことにした。

「『カグヤ』さんは、カオルさんにとってどうい

方だったんですか？」

目を開けて立ち上がると、かぐやが私を見つめていた。私は彼女の右手を握ってから、話し始める。

「カグヤはね、太陽みたいな人だったんだ。元気で明るくて、こつちまで楽しくなっちゃうような人です」

私が「カグヤ」にそう言った時、決まって彼女は、「カグヤなのに太陽なんだ」と笑っていた。そんなくだらない冗談でさえ、今では愛おしく思える。

「カオルさんは、『カグヤ』さんのことが好きだったんですか？」

「そうだね。そうでなきゃ、親に疎まれてまで付き合ったりはしないよ」

両親に恋人としてカグヤを紹介した夜、彼らは私たちの交際に猛反対した。何度も「カグヤ」と別れることを勧められたが、その度に忠告を無視していた。

「そんな素晴らしい人と私なんか、同じ名前が良いのでしょうか？ 少し気が引けてしまうのですが……」

「そんなこと気にしなくて良いんだよ。むしろ、自分の好きな人の名前を拾ってきた子につけちゃうのが異常なだけだからさ」

震えるかぐやの手を握りながら、私は彼女の顔をポンと叩いた。すると彼女は、驚いたように私の顔

を見上げる。

「ねえ、かぐや。あの人はさ、なんで死んじゃったんだろうね」

握っていた手をほどき、それをコートのポケットにやった。そうしてその中から、バージニア・エスを一本取り出し、火をつける。口に当て、離し、ふうと息を吐くと、隣でけほけほと咳き込む声があった。

「あ、ごめん。煙たかった？」

「はい。すみません、この臭いはあまり好きではないです」

そう言ったかぐやは、もう一度咳き込んだ。私はそれを見て、すぐにバージニア・エスを捨てる。

「ごめんね、煙たかったよね……」

私は言いながら、かぐやを抱きしめた。そこで、私の体に彼女の体が当たり、そのふんわりとした温かさが、じわりと伝わっていった。

「いえ、こちらこそすみません。これくらい耐えられれば良かったのに」

かぐやはそう言ったそばから、もう一度けほけほと咳き込む。

『カグヤ』の墓石の前に捨てられたバージニア・エスは、悲しげに白煙を上げていた。

私とかぐやのいるキッチンに、格別の音はなかった。鍋の中のカレーがぐつぐつと煮える音が、キッ

チンに響く唯一の音。私はその静寂に耐えきれなくなり、コンロの火を切る。そして棚から皿を取り出し、ご飯とカレーを二人前よそい、机に置いた。食事が始まれば、何かしらの会話が生まれると思ったのだ。

私は合掌してから、心の中でいただきますと言う。かぐやも私に続き、遠慮がちにスプーンを持つ。

「おいしいですね」

かぐやが、か細い声でそう言った。彼女の言う通り、今日のカレーは今までと比べて格別の美味しさだった。

「そうだね、美味しい」

私はそう応え、またカレーを食べ始める。かぐやも作り笑いをしてから、スプーンでカレーをすくって食べた。

墓参りから帰ってきて以来、かぐやには笑顔がなかった。今だって、どこかばつの悪そうな様子でカレーを食べている。原因はいくつか考えられるが、一番大きいのは、私の墓での様子だろう。

かぐやは、私を元氣付ける目的で外出を持ちかけた。それにもかかわらず、私は依然思いつめたまま。彼女は、私をうまく元氣付けられなかったことを申し訳なく思っているのかもしれない。

「あの、すみません。言わなければならぬことがあるんですけど、良いですか？」

スプーンを置いたかぐやが、神妙な面持ちでこちらを見つめている。私はその表情を見て、思わず居住まいを正してしまう。

「言わなきゃならないこと？」

「はい。大切なお話です。それを今しても、大丈夫ですか？」

「うん。まあ、大丈夫だけど」

私がそう言って頷くと、かぐやは一つ深呼吸をした。そうして彼女は、私の目を真っ直ぐ見つめる。そこで私は、彼女に笑顔がなかった理由が、自らの墓での様子でないことを悟った。彼女は、秘め事をしてきたのだ。それで、ばつが悪そうにしていたのだろう。

「わたしは今夜、月に帰らなければならないのです。私がかこへ来れたのは、月の統領から一日だけ地球に行くことを許されたからなんです」

かぐやは私の目を見つめたまま、はつきりとした声でそう言い切った。私はそれをしつかりと聞いたが、しばらくその内容を受け入れることができなかった。突拍子もないことで当然納得はいかなかったが、ひとまず彼女の言うことを信じて、話をしてみることにした。

「かぐや、君は月の住人だったんだね」

「今まで黙っていてすみませんでした……」
かぐやは言いながら、小さく頭を下げる。

「どうしても帰らなきゃダメなの？」

「はい。今晚帰らなければ、わたしは月の統領に殺されてしまいます。月の掟では、統領の許可なしに人間界で滞在することが一番の重罪とされるのです」

彼女の放った『殺される』という言葉に、私はぞつと寒気を感じた。今日の前にいるいじらしいかぐやが殺されるのは、きつと見るに耐えないだろう。しかし心の中では、彼女との別れを受け入れられない私もいた。

「かぐや、月は良いところ？」

「はい。地球のように自然が豊かではありませんが、壮大な星空を眺めることができます」

かぐやは月の様子をそう説明した。

「人間が月で生きていくことは、可能なの？」

「カオルさん、まさか、月で暮らそうと思ってるんですか？」

「そうだね。私は、まだかぐやと一緒にいたいから」
 今度は私が、かぐやの目を真つ直ぐ見つめた。情けないがやはり私は、かぐやと別れたくないと思ってしまうのだ。彼女といると、『カグヤ』との楽しい思い出に浸ることができる。その感覚を、私は手放したくなかった。

「それはダメ！」

私の言葉を聞いたかぐやが、ぱんと机を叩いた。

その振動で浮き上がったスプーンが、からんと床に落ちる。

「どうして？ 私が君と一緒に月へ行くのが、嫌なこと？」

「そうではありません。人間が月の住人と一緒に月へ行くと、その人間はもう地球では生きられなくなるからです」

「どういうこと？」

「『月の遣い』が、カオルさんを月の環境に順応できる体に『手術』をするんです。そうしないと月では暮らせません。しかし逆に、月で暮らせる体になると、地球では暮らせない体になってしまいます」

かぐやはそう説明しながらも、『手術』の詳しい内容の言及をあえて避けているように感じられた。

「カオルさんだって、地球での暮らしがあるでしょう？ だから、私と一緒に月に行くのは無理なんです」

私はかぐやがそう言うのを聞きながら、その声が震えていることに気がついた。私はそこで立ち上がり、彼女の隣に突如現れた椅子に座った。そうして彼女の右手を握る。

「無理じゃないよ」

「無理ですよ。月の掟には逆らえません」

「それは、私が『人間界の掟』を破らなかった時の話でしょ？」

「え？」

私は言いながら、かぐやの頬に手を触れる。すると彼女は、訝しげにこちらを見た。

「私が、もう地球で暮らさなくても良いと思ってるなら、かぐやと一緒に月へ行けると思わない？」

私がそう言うと、かぐやは目を見開いた。私はそんなかぐやの額に軽く人差し指を当て、笑いかけてやる。

「地球で暮らさなくても良いだなんて、本気で言ってるんですか？」

「うん、本気だよ。私がここで生きる意味は、もうないからさ」

私は『カグヤ』と出会ってから、この子のためなら死んでも良いと思つて生きてきた。そしてその彼女が亡くなった今、私はここで生きる意味を、見出せるとは思えなかった。

「だからさ、かぐや。一緒に月へ連れて行ってよ」

私がそう言つて笑いかけると、かぐやは小さく頷いた。部屋に充滿するカレーの香りは、心地よく鼻を刺激した。

かぐやと共に家の外へ出ると、夜空には、満月が煌々と光っていた。街灯の光にも負けず、むしろそれすらも凌駕するような勢いで、月はその輝きを夜空に湛えていた。

私は今から、あの月へ行くのだ。愛おしい思い出とかぐやを連れ立って、私はこれから、月へ行くのだ。

後悔はない。「カグヤ」を思って死ぬのなら、それは本望。とても気持ちの良いことに思えた。

「本当に良いんですね？」

私の隣で正座していたかぐやが、そう問いかける。彼女が朝から着ていた十二単衣に描かれている紫苑の花は、夜空の中でもはつきりと見えた。

「さつきも言ったでしょ？ ここに未練はない。私は、かぐやと一緒に月へ行きたいんだって」

「わかりました。それなら良いです」

かぐやはそう答えたが、俯いていたため、その表情はわからなかった。

私たちは隣り合って座り、夜空を見上げながら、月からの迎えを待った。かぐやの話では、月の迎えは彼女が昨日地球へ降り立った時刻、二二時ちょうどにやってくるらしい。それまでは私たちは、こうして夜空を眺めて待つことにしていた。

「月が綺麗ですね」

私が、夜空に散らばる星を数えていると、隣からそんなかぐやの声が聞こえてきた。私は思わず耳を疑う。

「え、かぐや、今なんて言った？」

「月が綺麗だと言いました。私の故郷は、地球から

見てもとても綺麗に見えますから」

あつけらかんとそう言いながら、かぐやはふわり笑った。その笑顔に外連味はなく、夜空の下でも、白く美しく映えていた。私はふうと息を吐く。生前の『カグヤ』はなかなかの演技派だったが、今隣にいるかぐやは、純粹な少女であるようだった。

「なんだ、普通に月が綺麗だと思っただけなのね」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ」

私は自らの勘違いを悟られぬよう、平静を装った。会って一日も経っていないかぐやが告白してくるなど、そんなことはあるわけがないのだ。

「そろそろ、二二時ですね」

かぐやの言葉を受け、私は手元の腕時計を確認した。時刻は二〇時五十九分。あと一分で、月からの迎えがやって来る。私は腕時計から視線を上げ、辺りを見回した。

自らを取り囲む風景に、私は驚嘆してしまった。私とかぐやの周りには、無数の紫苑が咲き誇っていたのだ。夜空の満月も先ほどより強い光を放ち、無数の紫苑を照らす。四方八方に咲き誇る紫苑は月光を受け、幻想的な空気を作り上げていた。

私は言葉を失った。紫苑の薄紫と月光の金が混ざり合った色彩は、今までの記憶にも引けを取らない、圧巻の風景を作り上げている。

「もう来ますね」とかぐやの声がした。その声と同時に、頬を風が撫でていく感覚を味わった。そしてその風は次第に強まっていき、いよいよ、紫苑の花弁を散らせるほどの強風となった。私は強風に目を細める。隣にいたかぐやも、その長い黒髪を、ぶいぶいなびかせていた。

薄紫の花弁が宙に舞う。かろうじて開けた目に、そんな光景が写る。

そしてその次の瞬間には、数多の星を抱える夜空が、真つ二つに割れる光景を見ていた。その金色の裂け目から、猛スピードで雲が飛んで来る。仙人が乗っついそうだと例えるのが妥当であろうか。

私とかぐやは目を合わせ、頷き合う。どうやらあの雲が、『月からの迎え』ということらしくった。私は口を結び、迫る雲を眺む。そして、雲が寸前まで来た次の瞬間には、私たちの体は宙に浮き、気づけば、無数の星たちに囲まれながら、空の上を浮遊していた。私は遠く臨む月に手をかざしてから、隣のかぐやを見る。そこで彼女は、なぜだか悪戯っぽく笑っていた。私は訳がわからず、ただ彼女を見つめる。

「カオル、また会えたね」と透き通った綺麗な声が聞こえたのは、その後だった。

『月の遣い』コメント

本作は『竹取物語』を下敷きに、読者によって解釈が分かれる作品を狙いました。その解釈の分かれ目として、筆者が意図しているのが、①主人公「カオル」の性別、②「月」の意味です。

① 本作において、主人公「カオル」は美しい女性である「カグヤ」に思いを寄せており、普通に読めば「カオル」は男性です。しかし、「カオル」が女性ととれる描写もあります（「カグヤ」との交際を両親が反対している点、「カオル」の吸っていたバージニア・エスは女性が吸うことの多い銘柄であるという点）。

② ラストの描写から、「かぐや」は「カグヤ」であるということがわかります。そして、「カグヤ」は故人であり、また、冒頭の描写から、「カオル」が自殺を図っているとも読めます。以上から、「月」が現実という月とは少し違った存在であるということを書かせました。

本作は以上のように、読者それぞれが解釈をして楽しんでほしいという意図をもって執筆しました。